

「奈良・在日外国人保護者の会」の活動とその意義

— 民族的アイデンティティの育成に焦点を合わせて —

李 和 子*・田 渕 五十生

奈良教育大学社会科教育講座 (社会科教育)

(平成17年5月6日受理)

Activities and Significances of “The Association of Nara Foreign Children's Guardian” — With Special Reference to It's Role in the Fostering Ethnic Identity —

Hwaja LEE* and Isoo TABUCHI

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education, 630-8528 Japan)

(Received May 6, 2005)

Abstract

In 1992, guardians of Korean children in Nara Prefecture formed “The Association of Nara Foreign Children's Guardians” (henceforth “Guardian's Association”). 12 years have passed since they began to develop activities.

Over the last years, they have held various events and projects, such as annual summer camp for their children in order to give them an opportunity to meet each other who have lived separately throughout Nara Prefecture. They have also sponsored children's cultural festivals to demonstrate their own ethnic culture.

The aims of this paper are to report on the activities of “Guardian's Association” during the past 12 years, and to clarify the role of the guardian in fostering their children's ethnic identities. Reflecting what “Guardian's Association” did for these 12 years, we would like to confirm what kinds of educational practices are expected of the organization of the foreign children's guardians. Furthermore we would like to extract information and learning to be shared among Japanese teachers in the field of the multicultural education from the history of their educational practices.

This paper is composed as follows:

Firstly, the situations of the Korean people in Nara Prefecture, and the aim of “Guardian's Association” are described.

Secondly, the activities of “Guardian's Association” for the past 12 years are roughly sketched in the abbreviated chronological table.

Thirdly, we mention what “Guardian's Association” systematically did, focusing on the main activities, what educational practices were appropriate to foster ethnic identity, and what children learned through the activities.

Finally, considering the matters mentioned above, we go on to show the significances of the activities of “Guardian's Association” as well as their problems to solve in future.

* 「奈良・在日外国人保護者の会」会員

Key Words : ethnic identity
multicultural education
Korean people in Japan

キーワード : 民族的アイデンティティ
多文化教育
在日コリアン

1. はじめに

在日コリアンへの教育は長い歴史を持ち、四半世紀にわたる実践史の中から、「本名を呼び、本名を名乗る」という実践のスローガンが紡ぎ出されてきた。それは、本名を民族性の象徴としてとらえ、コリアン児童・生徒には民族的なアイデンティティを育成し、その一方で、日本人児童・生徒には彼らの違いを違いとして尊重できる態度を育成しようとするものである。このスローガンの重要性は、「本名を呼ぶ」という課題を日本人側の児童・生徒に求めることと、「本名を名乗る」という課題をコリアン側の児童・生徒に求めることを連携させている点である。

コリアンの子どもが通名という「外套」を脱いで、本名を名乗るには、それを励ます教師の熱心な働きかけが必要である。また、それを承認する周囲の日本人の児童・生徒の許容的な雰囲気、すなわち支持的な学級や集団づくりが求められる。さらに、本名を名乗る子どもたちの保護者の協力と同意が必要である。けれども、保護者の重要性は認識されつつも、その具体的な取り組みについては、従来あまり報告されてこなかった。

全国で取り組まれた実践の中から優れたものが、「全国朝鮮人教育研究大会」で報告されてきた。それは、在日コリアンの教育に意図的に取り組んできた教師たちが、1979年に組織した「全国朝鮮人教育研究協議会」が、翌年から毎年開催しているものである。現在では、ニューカマーの子どもたちも視野に入れて、組織名も「全国在日外国人教育研究協議会」に、研究大会名も「全国外国人教育研究大会」に変更され、2004年度で25回を数えている。

そこで報告された多くは、教師が主体となつての実践が中心で、保護者たちによる実践報告は、過去の発表事例724中で以下の12事例⁽¹⁾にすぎない。

- ・神奈川・オモニの会「ありのままの自分に誇りを持って—子どもを見守るオモニの会」1982年・1983年
- ・川崎子供を見守るオモニの会「本名で生きることの意味」1984年
- ・兵庫・在日外国人保護者の会「在日とわたしたち」1991年
- ・大田区オモニの会「大田区オモニの会と区教育委員会交渉」1992年
- ・京都・メアリ会「メアリ会とわたしたち」1993年、

- 「はじめの第一歩—シジャギ パニダ」2002年
- ・石川・セオリニの会「セオリニの会から学ぶこと」1996年
- ・民族共生教育をめざす東京保護者の会「民族共生教育をめざす東京保護者の会の活動について」1998年
- ・広島・在日コリアン安芸府中保護者会「Sの本名宣言—差別事件をのりこえて—」1999年
- ・兵庫・保護者梁壽龍「共に生きる三田市民の会から三田在住外国人保護者の会設立まで」2001年
- ・日本の学校に通う子を持つアボジ・オモニの会「私たちにできることって何だろう?—親として、在日として」2002年

以上の発表は、いずれも個別の取り組みの実践報告が中心であり、保護者の活動そのものを対象化して民族的アイデンティティの育成との関係で論じたものは、管見する限り本稿がはじめてであろう。

本稿は、1992年に結成された「奈良・在日外国人保護者の会」(以下、「保護者の会」)の12年間にわたる活動を報告して、児童・生徒の民族的なアイデンティティの育成に果たす保護者の役割について明らかにしようとするものである。いわば実践史の中から共有財産を析出しようとするものである。それらの考察は、その必要性が今後ますます求められる他の外国人保護者の組織化のモデルになるものと確信している。

まず、奈良県において在日コリアンがどのような状況に置かれており、保護者たちがどのような想いで「保護者の会」を結成したのかについて報告する。

次に、過去12年間にわたって展開された「保護者の会」の活動について、略年表的に素描する。

さらに、「保護者の会」が組織的に取り組んだ主要な活動に焦点を合わせて、どのような実践が展開され、参加した児童・生徒が何を学んだのか、保護者の立場から詳しく報告したい。

最後に、民族的アイデンティティを育むために、「保護者の会」の活動がどのような意義があったのかについて考察すると同時に、どのような課題が残されているか明らかにしたい。

2. 「保護者の会」設立の経緯と目的

2. 1. 奈良県における在日コリアンの状況

奈良県に在住する在日コリアンは2003年末現在で5,421人である⁽²⁾。隣接する大阪・京都などの多住地域に比べて、その数は少数で、しかも分散している。定住に至る歴史は、1910年から35年間にわたる植民地時代に、生活の糧を求め渡日し、鉱山や森林開発、ダム・トンネル・道路・河川工事などの過酷な労働に従事した人々とその家族の永住化にさかのぼる。1945年の解放後は、大阪のベッドタウン化による転入も増え、多様な在日コリアン社会が形成されてきた。

朝鮮半島から渡ってきた一世世代は、「祖国」に帰る日を夢みて、異国での厳しい生活に耐えて子どもたちを育ててきた。だが、日本生まれの二世・三世は、「祖国」は観念的にしかとらえることができず、日本に定住する意志を持って子育てをしてきた。地域や学校や職場で、根強い社会的差別と文化的同化の壁に取り囲まれている。かつては在日コリアンが密集する地域が奈良県にも少数点在していたが、現在ではそのような共同体もなくなりつつあり、核家族化も進行している。このような状況から、在日コリアンの姿が、日本人だけでなく同胞同士からでさえ「見えない存在」となっている。

地域で孤立・分散している在日コリアン二世・三世の多くは、自らの文化や歴史について学ぶ機会がなく、民族的自覚を持ってないまま成長した世代である。そして今なお、民族名が名乗りにくい困難な状況で子育てをしている。県下には奈良朝鮮初級学校が一枚あるが、地域の公立学校に通う在日コリアンの子どもと保護者たちには、民族文化との出会いの場はほとんどなかったといえる。

2. 2. 「保護者の会」の設立の経緯

県下に点在している在日コリアンの子どもたちを結びつけ、自らの民族性をありのままに認め、民族的な自覚を育むため、まず保護者が相互に支え合う必要性から「保護者の会」が発足した。

会が結成される背景には、同和教育の取り組みを発展させた在日朝鮮人教育の積み上げがあった。奈良県教育委員会は、1986年「在日外国人（主として韓国・朝鮮人）幼児・児童・生徒に関する教育指導指針」を策定した。これは全国に先駆けた画期的なもので、長年在日朝鮮人教育に関わった教師たちの強い要望によって実現したものである。

1991年には、「奈良県外国人教育研究会」（「県外教」）が、県内の保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教職員によって組織された。保護者たちのつながりは、在日外国人教育に取り組む教師との出会いから生まれたのである。

1992年9月13日、橿原市の大久保隣保館で開かれた結成総会には、在日コリアン保護者50数名、外国人教育に関わる教師たち、合計150余名が参集した。翌日の新聞各紙⁽³⁾には、在日コリアン保護者や日本人教師たちの期待にふくらむ声が大きく掲載されている。

- ・子どもには私たちと同じ苦しい思いはさせたくない
- ・思いがあっても持っていく場がなかった。親たちが出会える場ができた
- ・子どもたちが自分は在日韓国・朝鮮人であるとはっきり言えるような環境にしていきたい
- ・県内では在日韓国・朝鮮人の子弟約千人が日本の学校に通っているが、自分の本名を名乗れないなど、子どもたちを取り巻く状況は厳しい。我々教師も保護者と交流を深め、問題の解決にあたりたい

「保護者の会」結成にともない、共に準備を進めてきた教師を中心に「奈良・在日外国人保護者とともに歩む会」（「ともに歩む会」）が10月3日結成された。この会は「保護者の会」の活動を教師の立場からバックアップするために組織されたものである。

2. 3. 当初の活動と目的

結成直後、月一回、第3日曜日に定例会「モイム（集い）」を開いた。そこは何でも話し合える場で、様々な生き方の在日コリアンが、「子どもの教育」という一点で集まった。民族名のための者、民族名と日本名の両方を使う者、40年間民族名を一度も呼ばれたことのない者もいた。日本国籍の取得者や国際結婚、韓国生まれの者もいた。

保護者たちは、これまでの自身の被差別体験、「民族」への思い、子育ての悩み・不安など、堰を切ったように語りあった。そこで語られた保護者の思いをいくつか紹介する⁽⁴⁾。

- ・いろんな話を聞いて、私の悩みもみんなの思いも同じだという事、そして、それぞれが頑張っておられることを知って力強いエネルギーをもらいました。
- ・子どもは自分のことを日本人だと思っている。朝鮮人であることをどのように伝えたらいいのか。みなさんはどのように話されましたか。
- ・私は子どもを本名で呼んでいます。でも日本に住んでいるので日本名で学校に通わせています。日本の学校には、何も期待していなかった。
- ・子どもたちが受けているイヤな思いは、親が受けてきたイヤな思いと同じ。それは、社会がちっともかわっていないからじゃないですか。

多くの同胞と出会うことで、周囲の日本人と違う生活習慣、例えば雛祭りや七五三など学校で疎外感を感じた

こと、自分の民族を否定的に捉え、民族性を丸出しにした祖父母を疎ましく思ったり恥たりしていたことが、「私一人」の「特別」なことでなく、われわれ世代に共通した被差別体験であったことを確認させられた。そして、「私と同じような気持ちを抱えている人がこんなにたくさんいるんだ」という仲間意識と連帯感を深めていった。

保護者たちは教師と本音で語り合う座談会を何度も開いた。教師から差別されたことはあっても民族を尊重された経験をほとんど持たない世代である。在日外国人教育に熱心に取り組む教師に出会い、保護者は教師に対する信頼を回復していった。そして、県内の在日外国人教育に関する情報収集と、意見交換を行った。

その過程で、保護者は次のような指摘を行った。在日コリアン教育では、①日本人児童生徒の多文化共生の資質を育成する教育と、②在日コリアン児童生徒の自尊感情の形成を支援しアイデンティティを確立させる教育の両方が必要である。しかし、②の在日コリアンの民族的アイデンティティを育む教育の実践報告は、県内では殆ど行われていないのではないかと問題提起である。

その課題は、民族的自尊感情の形成が阻害されてきた二世・三世世代の保護者にとっては切実な問題であった。例えば、「モイム」参加者たちは、子どもに通名をつけた理由として次の二つをあげている。一つは、民族差別と偏見から子どもを守るためである。二つ目は、保護者自身が民族の言葉も文化も知らず、自然に通名を選んだというものである。このような通名使用の理由は、京都大学教育学部比較教育学教室の報告⁽⁵⁾とも一致している。

モイムではまず、差別や偏見を生みだしてきた歴史的経緯や社会的背景などについての学習会（全4回）と人権学習会（全6回）を持った。歴史学習は驚きの連続であった。中国や日本に侵略されるだけの弱小民族というイメージから、固有の歴史と文化を発展させてきた独自の民族であるというイメージに一変した。同時に、民族楽器や踊り、韓国料理の民族文化講習会も開いた。民族文化との出会いも、われわれ保護者を勇気づけ、民族への「誇り」を育むのであった。朝鮮民族のこのような豊かな文化にもっと早く出会っていたなら、民族的な劣等感や虚無感に陥らなく成長できたという後悔と喜びがない交ぜになった感動であった。

この感動を伝えるために、月に1回、会報を発行し、モイムに参加できない保護者とも情報交換の場をつくった。そのような活動を通して、子どもたちの教育問題の主体者として、力を結集する必要性を自覚していった。現在、次の三つを「保護者の会」の目標として活動を進めている。

一、県下全域に分散する在日コリアンの保護者と子どもたちをつなぎ、親睦と交流の輪を広げる

二、子どもたちが自らの言語、文化及び歴史を学び、民族としての自覚と民族的独自性を維持できる教育を確立する

三、外国人住民と日本人がお互いの文化や歴史について理解し、認め合って共に生きる多文化共生社会に貢献する

3. 「保護者の会」12年のあゆみ

3. 1. 「保護者の会」12年間の活動記録

以下に、保護者会12年の歩みを略年表的に素描し、その全容を報告したい。

92年9月	結成総会 檀原市大久保隣保館 150名
93年6月	パンフ「ウリマダン（私たちの広場）」発行
8月	第1回オリニ・サマーキャンプ（以下オリニキャンプ、オリニは韓国語で子どもという意味）大和郡山市立少年自然の家 参加者数：100名（幼小中学生51名）
9月	1周年集会 檀原市大久保隣保館100名自主ビデオ「保護者の会1年の歩み」上映
94年1月	生駒市市長選全候補者に定住外国人施策に関する公開質問状を提出 （以後、各市長選挙時に公開質問状を提出）
8月	第2回オリニキャンプ 大和郡山市立少年自然の家 125名（幼小中51名、日本人児童27名、保護者・教師47名）
95年8月	第3回オリニキャンプ 生駒山麓公園野外活動センター 201名（幼小中56名、日本人児童59名、保護者・教師86名）
96年7月	檀原オリニ会発足 於：檀原市立新沢小学校 オリニ6名、保護者・教師24名
8月	第4回オリニキャンプ 生駒山麓公園野外活動センター140名（幼小中高67名）
10月	生駒オリニ会発足 於：生駒市図書館 参加者数：オリニ11名、保護者6名
97年8月	第5回オリニキャンプ 奈良市青少年野外活動センター158名（幼小中高70名）
9月	5周年記念フォーラム「生きる力となる教育を求めて」 於：生駒山麓公園ふれあいセンター 100名
11月	第1回オリニ・フェスティバル IN なら 於：奈良県社会福祉総合センター 200名
98年4月	5周年記念フォーラム報告集 『生きる力となる教育を求めて』刊行
8月	第6回オリニキャンプ 奈良市青少年野外活動センター 163名（幼小中高68名）
11月	第2回オリニ・フェスティバル IN なら

於：橿原市立畝傍北小学校体育館 300名
 99年8月 第7回オリニキャンプ 110名
 ユースキャンプ 41名
 於：生駒山麓公園ふれあいセンター
 11月 第3回オリニ・フェスティバル IN なら
 00年8月 第8回オリニキャンプ／ユースキャンプ
 10月 第4回オリニ・フェスティバル IN なら
 01年8月 第9回オリニキャンプ／ユースキャンプ
 10月 第5回オリニ・フェスティバル IN なら
 02年6月 10周年記念連続セミナー開催
 8月 第10回オリニキャンプ／ユースキャンプ
 10月 第6回オリニ・フェスティバル IN なら
 10周年セミナー報告集『輝く瞳』刊行
 03年8月 第11回オリニキャンプ／ユースキャンプ
 10月 第7回オリニ・フェスティバル IN なら
 04年7月 第11回オリニキャンプ 124名
 ユースキャンプ 48名
 10月 ウリ・フェスタなら2004（第8回オリニフ
 ェスティバル）奈良市立鼓阪小学校講堂
 参加者数：350名

以上列記した12年にわたる会の活動は、大きく3つの時期に分けることができる。結成から5周年までがむしろに走り続けた創成期、5周年から10周年まで軌道に乗った発展期、10周年以降の世代交代が進む転換期である。以下、それぞれの特徴を記述する。

3. 2. 創成期（結成から5年目まで）

まず、第1期は、在日コリアンの子どもたちへの理解を深める時期、すなわち足場固めの時期といえる。①教育環境を改善する行政への取り組みと、②子どもたちをつなげる取り組みについて報告する。

3. 2. 1. 行政への取り組み

前項で紹介しているように「保護者の会」の結成時は外国人教育を推進する「追い風」の時であった。なぜなら、県教委が「指導指針」を策定し、教職員も「県外教」という推進機関を結成していたからである。

しかし、その一方で「誰が在日コリアンかわからない」という実践における初歩的な陥穽が存在していた。子どもたちの本名が小・中学校の9年間、指導要録などの公簿類に記載されていなかったのである。県教委の「指導要録は、小・中学校では、原則として学齢簿の記載に基づいて記入する」という指導にもかかわらず、一部の地教委は通名がある場合は通名だけで書類を作成して、就学案内を送っていたのである。さらに、小学校に通知する就学予定者リストにも通名のみを通知し、保護者の申し入れがあれば本名に変更できるものとしていた。つまり、保護者の直接の申し出がない限り、学校に届く以前

に本名が消され、指導要録が作成されていたのである。

「保護者の会」は、まず生駒市と交渉を行った。本名を勝手に抹消する市教委の姿勢は責任放棄であり、差別と偏見に基づいた行為であると指摘した。教師たちの同じような指摘に対しては無視していた市教委も、当事者である保護者の訴えには耳を傾け、見直しを始めた。

その結果、公文書への本名記載（通名がある場合はカッコ付きで記載）が県下全域で徹底されるようになった。また、多くの自治体が、入学案内時に、地教委の在日外国人教育に対する姿勢を明記した「本名で就学されることを願っています」という本名入学を呼びかける案内文書を出している。これは、本名入学の選択肢を保護者に委ねるだけでなく、「指針」に沿った教育環境の整備の責任が行政にあることの確認である。

本名使用においては、当事者の意志が尊重されるべきであるが、本名を名乗れる環境づくりは行政の責任である。そのことを行政に自覚させ、本名が消され「見えない存在」となっていた在日コリアンの子どもたちを「見える存在」にしたことは「保護者の会」の大きな成果である。

3. 2. 2. 子どもたちをつなげる取り組み

民族教育（＝自分を知る教育）の原動力になったのは「見えない存在」から「見える存在」となってきた子どもたちである。民族キャンプや民族子ども会で、「民族名」を呼び合い生き生きと活動する子どもたちの姿を目の当たりにして、教師と行政職員の意識は確実に変化していった。そして、保護者も子どもと共に成長していった。次に紹介するのは、「一周年の集い」に参加した橿原市在住保護者の発言の一部である⁽⁶⁾。

家族全員がこの一年間で民族と向き合えるようになってきました。そして、末娘がまず本名を名乗りました。その子を見て、私たち夫婦も本名を取り戻しました。今のままでは、これからの人生はからっぽの上に乗った人生違うやろかと思ったからです。子どもの前を一步ではなく半歩でもいいから歩いて、道しるべを残してあげたい。娘は、今、朝鮮人であることに喜びを持っています。私たち親は、自分が朝鮮人である喜びに気づくこともできなかった。一人でも多くの保護者に民族と出会って欲しいです。先生方、私たち保護者を出会わせて下さい。

最初に変化したのは子どもたちである。親と一緒にモイムに参加して、同胞の友だちに出会い、本名で呼び合う過程で、本名を名乗りたいという子どもたちが次々に出てきた。前述の保護者の子どもの場合、小2の時、学校で自分の本名をハングルで大きく書き、担任を当惑させ、どのように対処すればいいか担任も保護者に問い合

わせを行った。それに対して保護者は、「娘の気持ちを大切にしたい。本名を使いたいのならそれでもいい。けれども、周りの友だちがどのように受け止めるか心配だ」と答え、学校全体で真剣に受け止めてくれることを望んだ。翌年には長男が、続いて次男が、それぞれ自分の意志で本名を名乗った。そして、他にも本名で学校に行きたいという子どもたちが出てきたのである。

子どもたちの気持ちを真摯に受け止め、つなげていく責任が保護者にあると考え、子どもたちを対象にした民族教育活動を始めていった。まず、「保護者の会」と「ともに歩む会」から実行委員を選び、何回も準備会を持ち、結成翌年の8月に「オリニサマーキャンプ」を開催した。はたして参加者があるか危惧したが、それも杞憂に終わり、オリニ51名が集まり、多数の保護者、教師も参集した。二日間のプログラムは以下の通りである。

- | | |
|-----|---|
| 一日目 | ・ ハングルの基礎学習
・ イルム（名前）のプラバンづくり
・ 朝鮮の歌や遊びの学習
・ キャンプファイヤー |
| 二日目 | ・ タル（仮面）づくり
・ 民族楽器（チャンゴやソゴ）の練習 |

オリニキャンプにより多くの参加者を集めるために、①県・地教委、教育研究団体、同胞団体などの後援と支援を取り付ける、②各市の広報紙にキャンプの案内を掲載させる、③学校を通じてキャンプの案内を対象家庭に届けるという取り組みを行った。現在、①と②は実現しているが、③については、地域格差があり、教師の無理解から保護者の手元に届かない学校が今なお存在している。

次に、キャンプに毎年参加する子どもたちを地域でつなぐために、奈良市・生駒市・香芝市・橿原市・大和郡山市・大和高田市・生駒郡の各ブロックにそれぞれ代表を置いた。相互連携しながら地域に密着した活動を展開し、子どもたちの交流を日常化するためである。

3. 2. 3. 5周年セミナーの開催

結成から5年目、1997年9月15日生駒山麓公園ふれあいセンターで「保護者会結成5周年記念フォーラム」を開催した。

「保護者の会5年の歩み」の自主ビデオ上映後、「生きる力となる教育を求めて」というテーマでパネルディスカッションを行った。「保護者の会」、「ともに歩む会」、「県外教」のそれぞれの代表者が、5年間の活動を総括的にふり返り、参加者全体で熱心な討議が行われた。

「ともに歩む会」の初代代表の山中憲司氏は「僕は、この保護者の会と関わる前、在日朝鮮人教育をやっているといいながら、在日朝鮮人というレッテルと関わってきたと思う。金さん、李さん、一人ひとりと関わって学

ばしてもらった。民族と出会いをさせると言ってきたが、出会いだけではあかん、やっぱり、民族を取り戻すことを保障しないとイケないと思っている」と述べ⁽⁷⁾、民族教育権の確立を教師の立場から提言した。これは、保護者との協働作業を通して深められた認識であり、具体的な固有名詞を持つ人との連携の重要性を示唆している。

県教委からも来賓挨拶の中で「保護者の会の活動を大きな地域の教育力としてとらえ、本年度からオリニサマーキャンプの後援をしている」という言葉⁽⁸⁾とともに、多文化共生能力の育成に保護者の会の存在は不可欠であったという評価を得た。

このセミナーで、保護者、教師、教育行政それぞれの主体的な活動を評価・認知して、協働活動する必要性が確認された。また、保護者の自立的な民族キャンプやオリニ会活動が地域の教育力として多文化教育を推進する一つの形態だという評価も得た。

いうまでもなく在日コリアンの子どもたちの民族的アイデンティティは、社会教育と学校教育の双方で育んでいくものである。その両者を統一した教育はまだ十分に達成されていない。公教育における民族教育権の確立という課題は残ったままである。

3. 3. 第2期 発展期（5年～10年目）

「保護者の会」の活動が、周知されるようになった5年目以降は、それぞれ地域に重点を置いた活動へと移っていった。第2期（1997年～2002年）は、地域活動を活性化し、地域で民族教育が自立的に展開された時期といえる。以下、主要な二つの取り組みについて報告する。

3. 3. 1. 地域のオリニ会活動

1996年7月、「保護者の会」橿原ブロックの保護者たちは「橿原オリニ会」を立ち上げた。続いて、同年10月には、生駒ブロックの保護者たちが、「ウリマル教室」を開設した。後に、「生駒オリニ会」と改称し、子どもたちが共に学び合える拠点になっていった。現在、県内に二箇所しかないため、北部地域は「生駒オリニ会」に、南部地域は「橿原オリニ会」に参加している。オリニ会活動は、各自治体でも評価され、橿原市、生駒市からそれぞれ助成金を受けている。

地域社会の中で、オリニ会活動を継続することの意味は大きい。その意義として民族教育活動に以下の3点で有益である。

- ① 日常の生活圏内で活動ができる
- ② 地域社会とつながった活動ができる
- ③ 地域の実状に合った活動ができる

生活圏に活動拠点がある意味は大きい。子どもたちの日常生活にオリニ会活動を組み込むことで、民族教育が「特別なこと」でなく「普通のこと」として肯定的に考えられている。また、オリニ会は市民文化祭や地域の祭

りなどの地域諸活動に積極的に参加しており、外国人住民が地域で生き生きと民族性を表現し、周囲の日本人と交流する機会となっている。さらに、オリニ会の構成メンバーは地域により異なっており、年齢、出自、国籍など、一人ひとりの子どもの属性を尊重し、地域の実態に合わせた取り組みが可能になっている。

3. 3. 2. 自治体との協働

民族教育は、保護者の熱意だけでできることではない。保護者を取りまく社会意識を変化させ、民族教育を自治体の教育課題と位置づける「教育指針」が必要である。外国人教育に関する「指針」のない自治体には策定を促す活動を展開した。その結果、現在、県下の11市中8市で外国人教育を推進するための「指針」が策定されている。その内、「保護者の会」の会員が参加してつくったのは、大和高田市（1996年）、奈良市（1997年）、大和郡山市（1999年）、橿原市（1998年）、生駒市（2000年）である。すでに策定している自治体には「指針」に即して具体的取り組みを促していった。策定後、生駒市では、「生駒市外国人住民教育推進懇話会」が設置され、「指針」の進捗状況や課題が当事者も参画して検討されている。

3. 4. 第3期 転換期（10年目から現在まで）

結成から10年が経過して、現在、「保護者の会」の活動は転換期を迎えている。この10年間、夏の「オリニサマーキャンプ」と秋の「オリニ・フェスティバル」、地域オリニ会活動、そして、学校や地域、行政機関への協力、参画など、「民族的アイデンティティを育む教育の確立」と「多文化・多民族共生社会の実現」をめざす活動を多方面にわたって進めてきた。その間の主要な取り組みと課題について報告したい。

3. 4. 1. 10周年記念セミナー

過去の活動をふり振り返り、今後の方向性を見出すため10周年事業の一環としてセミナーを開催した。在日の過去に学び、今日をふまえ、明日を開くという意味から、3回の連続セミナーを企画した。以下、それぞれの内容を紹介する。

第1回「ハルモニから学ぶこと」6月9日、桜井市
在日コリアン二世の女性二人をゲストに招き、ルーツ、生活の様子、差別と闘った実体験、そして次世代に対する願いや思いを学ぶ集会を持った。

第2回「ウリならしゃべり場」6月23日、橿原市
10年前にはオリニ（子ども）であったユース（青年）のメンバーから、民族、日々の葛藤、将来への希望、さらには結婚観など、若い世代の声を多方面から聞いた。ユースメンバーが、企画から準備、進行、報告集まで全てを担当する画期的なセミナーとして注目された。

第3回「民族教育の確立、豊かな多文化共生社会の実現をめざして」7月28日、生駒市

記念講演 金東勲龍谷大学教授「多文化が共生する地域社会と外国人教育」

パネルディスカッション 保護者、日本人教員、民族教育関係者の3人をパネラーに招き、保護者会活動の実践や「外国人住民教育指針」策定経緯、さらに今後の「民族教育の制度保障」に向けた提言など、「多民族、多文化共生社会の実現」に向けた、内容豊かなパネルディスカッションを開催した。

3回にわたるセミナーは、日本における民族的、文化的マイノリティーが自己の民族性や文化を継承する意義を確認する内容で、我々「保護者の会」のメンバーに知恵と勇気を与えるものであった。

3回のセミナーをまとめた報告集『輝く瞳』2000部を作成した。小冊子であるが、奈良県の外国人教育実践の一助になると確信している。

3. 4. 2. 多様化する在日コリアン教育

結成以後10年経過し、在日コリアン保護者の世代交代が進み、子どもたちの国籍やエスニティも多様化している。

日本国籍取得者が年々増え、1952年から2000年まで累計で24万人、1995年以降は年間1万人前後が「帰化」している⁽⁹⁾。さらに、日本人と「国際結婚」するケースが年を追うごとに増加しており（1990年以降、韓国籍者の80%以上が日本人と結婚）、その結果、日本人と在日コリアンの「ダブル」の子どもたちが増大している。また、韓国では1990年代に入り、海外への渡航が自由化され、留学や就労、結婚などの形で日本にやってくるニューカマーの韓国人が増大している。このように、「韓国・朝鮮」籍を保持する在日コリアンの減少、日本国籍取得者（帰化者）と「ダブル」の急増、そしてニューカマー韓国人の増大など、在日コリアン社会は多様な人々で構成されるようになり、奈良の地域にも現象している。

その傾向は、オリニキャンプやオリニ会の参加者にも如実に現れている。12年前の第1回オリニキャンプでは、日本国籍やダブル、ニューカマーの子どもたちは希少であったが、年々増加し、現在では半数近くを占めるようになってきた。在日コリアンの子どもたちの国籍、出自、文化、言語が多様化している現状をふまえた教育実践が求められている。

4. 保護者会の活動実践について

12年間にわたっての「保護者の会」の活動について報告してきたが、会の活動は大きく4つに分類できる。第一は、オリニの民族教育に関わる諸活動。第二は、地方自

治体、教育行政、学校への働きかけと連携。第三は、地域の国際理解、国際交流事業への参画と学校現場に出掛ける国際理解教育、人権教育への貢献。第四は、出版活動である。以下、それぞれの項目について詳述したい。

4. 1. 民族教育活動として次の3点を重点的に行っている。

4. 1. 1. 夏季キャンプの実施

小学生を対象にした保護者同伴の「オリニサマーキャンプ」(一泊二日)を1993年から、中学生を対象にした「ウリならユースキャンプ」(二泊三日)を1999年から毎年、実施している。関心のある日本人教師も加わり、例年150人規模に達する、子どもたちと保護者が一堂に集い、保護者たちは子どもたちの教育について本音で語り合っ

て親睦を深めている。一方、子どもたちは、民族の言葉や名前(民族名)の読み方を学び、本名で呼び合っ

て民族的な自覚を持ち、同じ立場の子どもたちがいること、そして自分たちは一人ではないという連帯感を実感している。中高校生・青年たちは、大阪市で民族教育に関わる民族文化指導講師の青年たちを通して、在日コリアンの人権問題や日本と朝鮮半島の歴史を学んでいる。また、民族楽器の演奏や民族舞

踏を学び、キャンプの最終日にその成果を披露している。小学生は、民族楽器で民族舞

踏を勇壮に踊るお姉さんお兄さんたちを見て、「中学生になったらあの仲間に加わることができる」という希望を持つようになっている。

以下、キャンプに参加した子どもの感想文の一部を紹介する。

- ・キャンプファイヤーがたのしかった。だって中学生と大学生が、チャンゴをやったからすごいなおもった。わたしもやってみたいとおもった(小2)
- ・はじめて参加して、はじめて会った友だちとも仲よくできてうれしかったです。また来年も来たいです。かんこくのがっきもむずかしかったけど、リーダーに教えてもらってうまくできました(小5)

中学生たちは、言葉や民族文化を身につけた民族講師の青年たちに、アイデンティティの対象を発見している。中学2年の女子生徒は、感想文に次のように記している。

夜の交流会で、リーダーの二人が、自分が本名を名のか名のかのらないかの心境を話してくれた。その時は、自分のことかはしゃべらんかったけど、話が聞けてヨカッタと思う。

オリニキャンプやオリニ会を卒業した青年たちが集まって、「中高生青年グループ」を作り、「ウリならユース

キャンプ」を企画している。かつて小学生であったオリニたちが、自らの力でキャンプを運営し、年少のオリニたちの指導をしている。この会は、親にも話せないことでも、何でも話し合え、同じ立場の青年たちが励ましあえる居場所である。この会を通して、学年を超えた繋がりが生まれている。

このように、民族キャンプ活動を毎年開催することで、同年代の横の世代と異年代の縦の世代のつながりが生まれ、その時空間が彼らのアイデンティティを育む絶好の機会になっている。

次に、奈良県の人権作文集⁽¹⁰⁾に掲載された中学生の作文を紹介する。いささか冗長であるが、キャンプの雰囲気伝わってくるので全文紹介したい。

夏休みの思いで 生駒市立中学校2年 金〇

8月2日3日韓国人の子どもたちのキャンプに参加しました。僕は、小学校4年生から参加して、今年で5回目です。小学生の時は、朝鮮の遊びやことばを習ったり、工作をしたり楽しいキャンプでした。友だちもたくさんで、毎年会うのが楽しみです。中学生になると、遊びや勉強だけでなく、中高生の交流会があります。今年は、中高生が17人でいろいろな話をしました。

僕が一番印象に残ったのは、名前のことで、全体の3分の2は日本の名前

前で学校に行っているそうです。僕は昔は、日本の名前もあつたらいいなと思っていました。小学校の低学年の頃は、自分の名前を言うのがはずかしくて、つい下を向いたり、声が小さくなったりしてしまいました。そんな時は、「日本の名前もあつたらちゃんと言えるのになあ」と思ったものでした。けれども、今は日本の名前など必要ないと思っています。毎年夏に行われるこのオリニサマーキャンプなどに参加することで、本名を力強く名乗るなかまがたくさんいることを知ったからです。みんな自分の名前に、そして自分自身に誇りを持っていて、堂々として見えました。そんな仲間との出会いを重ねているうちに、僕も少しずつ変わってきました。今では、胸をはって堂々と自分の名前をいうことができます。

日本の名前を名乗っている人たちは、朝鮮の名前をこの時だけ使っていたり、なかには父親が母親が日本人で日本の名前しか持っていないので、朝鮮の名前が欲しいという人もいました。

僕は、みんな自分の名前で行ってほしいと思います。僕は生まれたときから本名でしか生きていないからよくわからないけど、同じ韓国人として、本名で生きていくことの意味や、本名を持ちながらなぜ日本の名前を使うのかをこれから考えていきたいです。

金君は、日本名もあればいいと思っていたが、仲間に出会うことで「必要ない」と思ったとふり返っている。同じ立場の仲間に出会うことで、自分自身を相対化する視点が与えられると共に、他者の立場に思いを馳せることができるようになっていく。この作文にはそのような内実が語られている。この作文に勇気づけられたのは彼の両親である。在日二世の保護者は、自分たちのように「朝鮮」を隠して学校に通わせたくないと思いで通学させていた。しかし、小学校高学年の頃「日本の名前なの？」とふと漏らした子どもの言葉に心を痛めていた。この作文を読んだ保護者は、子どもの成長に安堵し、やはり親だけでは子どもは育たないことを実感したという。やはり、子どもの視野の拡大には同じ立場の仲間が必要なのである。

キャンプに参加した保護者と教師たちは、子どもたちが生き生き活動する姿から、以下に紹介するように多くのことに気づかされている。

- ・今回初めての参加だったのですが、本当に楽しい二日間でした。また来年も来たいと心から思いました。いろいろな体験を親子でできたこと、感謝しています（保護者）
- ・学校では毎日顔を合っているはずなのに、民族楽器（チャンゴ）を楽しそうに、汗をかきながら演奏している〇〇の生き生きした笑顔を初めて見たような気がした（教員）
- ・このような民族と出会える場が、保護者の思いとともに、公教育の場でもきっちりと位置づけられたらと思いました。微力ながら力添えしていけたらと思っています（幼稚園保育）
- ・今回で3回目の参加になりますが、今回は、学級の子どもと来ることができませんでした。来年は、ぜひとも子どもたちと参加したい（中学教員）

以上のような感想は、キャンプに参加した子どもたちの間で仲間の教育力が発揮されていたことを如実に物語っている。

4. 1. 2. 「ウリフェスタ・ナラ」

（旧称「オリニ・フェスティバル in なら」）の実施

1997年から毎年、在日コリアンの子どもの民族文化祭を実施している。開催主旨は次の4つである。①夏季キャンプだけでなく秋に文化祭を開いて出会いの場を年2回に増やす。②地域のオリニ会の交流の場にする。③学習成果の発表の場をつくり学習の励みにする。④地域に民族文化を発信し多文化社会であることを示す。

当初小学生だったオリニたちがユース（中高生・青年）となり、オリニという名称と実態がそぐわなくなってきた。そこで2004年、名称を改め、多文化共生社会を目指すマダン（広場）として再出発した。参加者も年々増

えて、2004年度は350人に達している。

奈良朝鮮初級学校にも参加を呼びかけ、朝鮮学校と日本学校、それぞれの在日コリアンが交流する機会となった。また、地域住民に参加を呼びかけて、日本人との交流の場にもなっている。以下は、その時のプログラムである。

- ・オリニ会文化発表
ソルチャンゴ（長鼓） 檀原オリニ会
民話劇「ホランイ（トラ）よりこわい干し柿」 生駒オリニ会
- ・奈良朝鮮初級学校（友情出演）
民族楽器重奏、朝鮮舞踊、民族打楽器
- ・サムルノリ 高麗会と保護者の会有志
- ・大型絵本「こいぬのうんち」 奈良教員有志
- ・スペシャルプンムル ウリならユース
- ・ノリマダン（朝鮮の遊びの広場）
- ・はるさめチゲを食べよう

「オリニ会」の子どもたちは、民族講師と一緒に、チャンゴ（長鼓）や、チュム（舞踊）ウリマル劇（韓国語劇）などを練習し、大勢の人たちの前で発表して達成感を味わい自信を深めた。

ユースのメンバーは、夏のキャンプ活動をさらに発展させ、多彩なプログラムを企画して、地域住民に自分たちの文化を積極的にアピールしている。

また、この「ウリフェスタ・ナラ」は、オリニ会活動を地域住民に知ってもらう機会にもなっている。多文化教育の絶好の機会と捉え、子どもだけでなく、PTAにも積極的に参加を呼びかける学校もあった。クラスの友だちを誘って来たオリニは、民族的アイデンティティを認める友だちがいることを自覚して、教室でも安心して自分の民族を表現できるようになるのである。

日本人教師は、「総合的な学習の時間」に取り組んだ教育実践をパネルで紹介したり、手作りの紙芝居や人形劇を披露したりしてこの文化祭を盛り上げている。このような民族教育に熱心な教師が徐々に増えている。保護者たちは、子どもたちの発表に声援を送りながら、民族料理を用意して参加者に振る舞い、キムチなどの物品販売でオリニ会の活動資金の調達を行っている。

その意味で、この「ウリフェスタ・ナラ」は多文化共生社会そのものである。われわれの課題は、この小さな時空間をどのようにして日本社会に拡大するかであろう。

4. 1. 3. 地域単位のオリニ会活動

「檀原オリニ会」と「生駒オリニ会」は、保護者の会費と各市の補助金で運営されている。教育行政の支援を受けながら小学生を中心に朝鮮をルーツにもつ子どもたちが集まり、お互いに民族名を呼び合い、つながりを深めている。

生駒市教育委員が発行している「生駒市外国人住民教育の手引き（資料集）」では、「生駒オリニ会」について次のように紹介されている。

現在、生駒市には、在日韓国・朝鮮人の子どもたちが集う「生駒オリニ会」があります。毎月第2と第4土曜日の午前中に、生駒市内の小学校で自分たちの国の文化や言葉を民族講師の先生とともに学習しています。幼稚園から中学生まで、20名近い子どもたちが楽しくチャンスを演奏したり、ハングルを勉強したりしています。この教室では、お互いに本名で呼び合い、同じ在日韓国・朝鮮人としてのつながりを深めていくことができます。奈良県では、大阪府のような民族学級がありません。奈良県内でもこれだけ多くの在日韓国・朝鮮人の子どもたちが集まる場所があるところは少なく、身近にそんな集いの場所があることはすばらしいことです。長い間、外国人住民が自らの国の文化や歴史について学ぶことが、学校教育の中で保障されてきませんでした。外国人住民がその民族性を自由に表現できる環境としてのオリニ会の果たす役割は、生駒市の教育においても大きな位置をしめることになるでしょう。

この手引き書は、保・幼・小・中の教師7名と在日外国人3名、教育委員会2名のメンバーで構成された「生駒市外国人住民教育推進懇話会専門部会」委員が作成したものである。2002年に第1集「資料編」が、翌年第2集「実践事例集」が市内の全教職員に配布され、日々の教育実践で活用されている。当事者が加わって市と市教委が協力して外国人住民教育の手引書を発行することの意義は非常に大きい。

このような教育環境で、生駒市の外国人児童・生徒の本名使用率は54.1%（2002年）に達している。これは、全国的に見ても比類のない高率である。ちなみに、奈良県の場合⁽¹¹⁾、本名（民族名）使用率は、保幼小で12.6%、高校で19.0%である。「学校が休みの土曜日はオリニ会で勉強や」と、友達にも自然に話すことができる在日コリアンの子どもの存在は、日本人の子どもたちの異文化理解を深める国際理解教育にもつながっている。

4. 2. 地方自治体、教育行政、学校（教師）への働きかけと連携

「保護者の会」は単なる親睦団体ではない。外国人教育の推進について、地方自治体への働きかけを行い、教育研究団体と連携しながら、その重要性を訴えてきた。

4. 2. 1. 地方自治体への働きかけ

3. 2. 1の項で、「本名問題」に対する行政の責任と役割について述べた。ここでは、保護者たちがどのよ

うなプロセスを経て、行政と連携を深め、教育施策に参画していったか、筆者のケースを例に述べてみたい。

筆者が学校教育に疑問を持ったのは、子どもの就学案内時である。通名の案内が届き、一瞬不安に襲われ、生駒市教委に次のように電話をした。

「子どもは幼稚園に本名で通っているのに通名の案内がきました。通名でないで学校に行けないのですか」

「通名がある場合は通名で送っています」

「通名で行けと言うことですか」

「いえ、本名でも結構です」

「本名でも」の「でも」にこだわりを覚えたが、「保護者の会」結成以前であり、誰にも相談できぬままその感情を胸に納めた。

4年後、「保護者の会」が結成され、筆者も参加するようになり、「誰が在日かわからない」という教師の言葉に、通名の就学案内が送付されたときの当惑感が蘇ってきた。そして、今回は、保護者会の仲間や教師と市教委に赴き、通名問題について糺した。当時の学校教育担当者は「通名のある人には、通名の案内を送っている。隠したい保護者の思いがあるから本名を学校に伝えている」と平然と答えた。「保護者の願い」という当局の意外な理由にとまどったが、どうしても納得できなかった。就学時に隠したいと思っても、16歳になると外国人登録の手続きを行わねばならず、隠しきれものではない。ましてや社会では通用しないのであるから。

本名抹消の原因は、市教委が当初主張していた「本名を隠したい保護者の願い」でなく、コンピューター処理上の問題（入力できる字数制限）であり、市民課の段階で通名だけが残り本名が抹消されていたことが後日判明した。これでは、朝鮮人を日本人として扱った戦前の植民地時代と同じ人権意識と言われても仕方がない。日本名を使用する人たちは日本人として扱って欲しいと願っているかのような日本人優位の「善意」の思い込みが、問題をより複雑にしていたのである。

「子どものためにどうすればいいか」、この一点で市教委と向き合って、何度も話しあって相互に理解を深めていった。市長選挙時には、外国人住民施策についての公開質問状を全候補者に届け、市独自の「教育方針」策定の公約を引き出して、ついに実現できたのである。

生駒市で、「保護者の会」メンバーが参加してできた施策、委員会等は以下の通りである。

- ・生駒市国際化基本指針 1996年3月
 - ・生駒市外国人住民教育指針 2000年3月
 - ・『人権教育のための国連10年』生駒市行動計画 2001年8月
 - ・生駒市外国人住民教育推進懇話会 2000年4月～
 - ・生駒市人権施策審議会 2002年4月～
- 生駒市以外、県下、各地の自治体で当事者である外国

籍住民を加えた政策立案が行われるようになったが、その多くに「保護者の会」のメンバーが参画している。その事実「保護者の会」の重要性が示されていよう。

4. 2. 2. 教育研究団体との連携

奈良県人権教育推進協議会や各市人権教育研究会等の教育団体と連携を持ち、われわれは、教育現場に保護者や子どもたちの声を届け、教育内容を豊かにする努力を重ねてきた。2002年度奈良県人権教育推進協議会研究大会では「多文化共生する地域社会をめざして～外国人保護者会活動から見えてきたこと」と題する報告を行い、オリニ会活動と学校教育をつなげる必要性を訴えた。また、各市の外国人教育に関する「手引き書」「資料集」に、保護者の思いや意見を反映させる教材づくりに協力してきた。

さらに、われわれは、多彩なゲストを招いて県単位での教育フォーラムを年に1回、開催してきた。

1997年「オリニたちに生きる力となる教育を！」

1998年「民族教育権って何？」

1999年「体験しよう！オリニ会（民族学級）」

2000年「総合学習って何だろう？」

2001年「保護者ができること？」

2002年「民族教育の確立・豊かな多文化共生社会をめざして」

2003年「朝鮮半島と在日コリアン、築いていこう多民族多文化共生社会」

これらのフォーラムは、奈良県教育委員会、奈良市、生駒市、橿原市などの各地方自治体の教育委員会から物心両面の後援、支援を受けて実施されている。

その他、関西で開催された異文化間教育学会や国際理解教育学会にも、青年たちが民族舞踊を披露して、「内なる国際化」の視点からわれわれの課題を提起したり、シンポジウムのシンポジストとして民族教育のあり方について報告を行い、現実から遊離しがちな学術研究にもいささかの貢献を行ってきた。

1994年 異文化教育学会研究大会の懇親会での民族舞踊の実演 龍谷大学

2000年 日本国際理解教育学会研究大会の懇親会での民族舞踊の実演と問題提起 奈良教育大学

2004年 異文化教育学会研究集会でのシンポジウムでの問題提起とサムルノリの発表 佛教大学

4. 3. 地域活動と地域への貢献

保護者会は、地域における交流事業にも積極的に関わり、地域に定住外国人住民がいることを訴え、以下のような取り組みを継続してきた。

4. 3. 1. 国際理解、交流事業への参画

地方自治体が主催する国際交流事業やイベントにも積極的に参画してきた。例えば、生駒市子ども国際交流の

集い「わいわいワールド」(2001年～)、「ひゅうまんフェスタ橿原」(1997年～)などである。民族楽器の紹介と演奏、韓国料理の講習会、キムチづくり講習会など韓国文化の紹介を通して、多文化共生の意義を目に見える形で示してきた。日本生まれの三世・四世であるため、紹介する文化内容については本国のものと異なっているが、文化的変容の事実としてありのままのものを提示することに務めている。国際交流事業に準備段階から関わり、共に参画することで行政や地域住民との交流の輪を広げてきた。

4. 3. 2. 国際理解、人権教育の「出前授業」

「総合的な学習の時間」の開始以前から、地域の幼稚園、小学校、中学校の要請に応じて国際理解教育や人権教育の授業へ、ゲストティーチャー・協同実践者として参画してきた。開発した教材やテーマは、「韓国・朝鮮のお正月」、「三年峠の劇をしよう」、「韓国の遊び」、「朝鮮の楽器」などで、実演を交えて披露している。また、「外国人教育」ビンゴゲーム、「ちがいのちがいのカード」ゲームなどの参加型学習の紹介も行ってきた。さらに、紙芝居、民族衣装、民族楽器、民芸品、遊び道具など、我々が収集した教材の貸し出しを行い、地域の国際理解教育に寄与している。

その他、人権講座や教員研修会の講師として、「共に生きていくために～在日朝鮮人保護者の思い」、「保護者として学校に望むこと」などのテーマで当事者の声を届けて、教師たちと連携を深めている。

以下に紹介するのは、筆者が2005年1月に奈良教育大学で行った講演に寄せられた学生たちのコメントの一部である。

・李さんの話を聞いて、一番印象に残ったことは、子どもたちに民族の文化を伝える活動をしていることです。生駒オリニ会などで育った子どもが、今度はリーダーになり、またそれを目標にする子どもが生まれと、非常に良いつながりだと思いました。李さんご自身の過去の体験から自分の子どもたちの世代にはそういった体験をしないでいい社会になって欲しいという思いが伝わり、私たち教師になる人間は、こういった問題に目を向け、多くのことに触れていこうと思いました。(1回生)

・今日の講義では、在日韓国人である李さんのお話を聞くことができた。その話の中で一番強く感じたことが在日韓国人の自己実現である。昨年の韓流ブームと共に身近になった韓国であるが、日本における在日韓国人の状況は厳しい。国家公務員の官僚試験が受けられなかったり、年金、選挙権がない。しかし、そういった現状に屈することなく本名を使い、様々な韓国文化の交流活動を行っている李さんは素晴らしいなと思っ

た。そういった活動は必ず子どもたちに伝わり、そして日本の社会にも広く浸透していくと思う（1回生）

筆者の訴えが、彼らの胸に「何か」を刻印したのではないかと手応えを感じることができた。われわれは、少しでも在日コリアンへの理解を深めて欲しいという思いで講演活動が続けている。しかし、「出会い」で終わっていないか危惧している。一つ一つの「出会い」を単なる「出会い」で終わらすのではなく、さらなる発展を求めている。われわれの訴えを発展させる教師がいて、初めて保護者の貢献が活かされるのである。

4. 4. 出版活動

われわれは、「保護者の会」の活動を記録し、国際理解教育、人権教育の教材作成などの出版活動を行ってきた。出版活動などとは無縁な「素人集団」であったが、ワープロも基礎から学びながら、集会の記録をメンバーで分担してキーボードに打ち込んできた。また、感銘を受けた講演を、一人でも多くの読者に届けたいという思いでテープ起こしを行った。われわれを衝き動かす「何か」がメンバーに共有されていたからである。刊行されたもののいくつかは、教育現場で教材として使用されている。以下に示すのは、主要な刊行物とビデオ作品である。

- ①会報「モイム」の発行（年4回）縮刷版発行（全7集）
- ②5周年記念フォーラム報告集『生きる力となる教育を求めて』1998年、1000部発行
- ③10周年セミナー報告集『輝く瞳』2002年、2000部発行
- ④活動紹介ビデオ、スライドの作成
- 「保護者の会1年の歩み」「保護者の会5年の歩み」
- 「保護者の会10年の歩み」「生駒オリニ会のオリニたち」

テープ起こしやビデオ編集などの煩瑣な記録活動を継続することができたのは、メンバー同士の励まし合いと、日本人教師との連帯感があったからである。

5. おわりに

12年間にわたる「保護者の会」の歩みと活動内容について詳細な報告を行ってきた。最後に「保護者の会」の活動が民族的アイデンティティの育成にどのような意義があったか考察し、残された課題について明らかにしたい。

第一の意義は、保護者自身の民族性の回復とエンパワメントである。

在日コリアン保護者をはじめ、外国人保護者は一般的に孤立しがちである。支え合い、励まし合える同胞の仲間を必要とするのは子どもたちだけではない。「保護者の会」のメンバーは、差別の現実にもぶつかっても、仲間

同士で励まし合い、差別をエネルギーに転化し、活動を進めてきた。人権意識を高め、自身の民族的な自尊感情を形成することで、教育について提言する力をつけてきた。確実に言えることは、「保護者の会」のメンバーが子どもの教育問題に主体的に関することで、保護者自身がエンパワメントされたことである。その姿が、結果的に子どもの民族的アイデンティティの育成に反映されたのである。そして、成長する子どもの姿に保護者もまた励まされてきたのである。

「オリニキャンプ」に参加した日本人教師たちの多くから「子どもたちは本当にキャンプを楽しんでいる。しかし、最も楽しんでいるのは、あなたがた保護者たちですね」としばしば指摘される。けれども、それは実感であり、納得せざるを得ないのである。

第二の意義は、子どもを媒介として学校（教師）と家庭（保護者）がつながったことで、子どもたちのアイデンティティの安定が強化されたことである。

民族的アイデンティティは、家庭と学校、そして地域社会との関係性の中で育まれるものである。家庭の中だけの民族教育では不十分で、学校教育や社会教育との連携が求められる。なぜなら、アイデンティティとは、自分が自分に対して行う自己規定（identify）であるが、それは周囲の承認があってはじめて安定するものだからである⁽¹²⁾。

われわれ保護者の世代は、自分をコリアンとして自己規定するものが何も無い状況に置かれていた。日本の学校へ入学することは、結果的に民族の言語、文化、歴史から切り離されることを意味していた。しかも当時は、通名使用が当然であり、同胞の仲間たちからさえ分断されていたのである。

けれども「オリニキャンプ」に集う子どもたちは、ハングルの基礎を学び、青年たちの乱打するチャングの響きに合わせて民族性を内面化（＝自己規定）する。そして、日本人のクラスメートも参加する「民族文化祭」で、自分たちの民族性が承認されるのである。

「本名」指導に関しては、特に、学校（担任）と家庭（保護者）の連携は必須である。突然、担任から「本名を」と打診されても、信頼関係がなければ、保護者は戸惑うだけである。時には、放置して欲しいと拒否する保護者もいる。けれども、そこには「いい加減な形での指導ならば…」という複雑な思いが込められている。「保護者の会」のメンバーは、教師たちとの協働作業を通して、生身の保護者に出会わせ、在日コリアン理解を深めている。そのような連携作業を通しての信頼感が、子どもたちの教育に還元されるのである。

第三の意義は、同世代・異世代間の子ども同士の教育力を組織したことである。

かつての在日コリアンがそうであったように、ニュー

カマーをはじめとする外国人児童・生徒は、多様な意味で「分断状況」に置かれている⁽¹³⁾。まず、祖国の言語や文化からの分断である。また、地域的にも分断されている。家族も地域社会から分断され、子どもたちも学校単位で分断されている。しかも、通名使用であれば、民族性は「見えない」状況である。そのまま放置されれば、強烈な同化の磁場が働く日本の学校文化の中で、子どもたちの民族的アイデンティティは保障されないであろう。

一方、空間軸についても「分断」されている。子どもたちは、「何故、自分たちが、今、日本にいるのか」という歴史からも分断されている。また、「自分たちはどのように生きて行けばいいのか」、「あの人のようになろう」という未来やアイデンティティの対象とも分断されている。そのような「分断状況」に置かれた二世の保護者たちが、子どもたちを民族キャンプや民族文化祭、オリニ会の活動を通して「連結」させ、相互に支え合う時間と空間を創造したのである。

キャンプでは、本名で呼び合うのが「当たり前」である。したがって、幼少時から自然な形で本名に触れている。また、キャンプでは、同年齢の仲間との出会いだけでなく異年齢との出会いも存在している。小学生のオリニにとっては、勇壮に民族舞踏を踊るユース（中高生）のメンバーは、「あのようなお兄ちゃんやお姉ちゃんになろう」という憧れの対象である。ユースのメンバーにとって、在日コリアンのリーダーたち⁽¹⁴⁾は、「あのようにハングルも話せて民族文化を体得した成人になろう」というアイデンティティの対象である。

そして、非常に喜ばしいことであるが、民族講師の青年たちにとって、われわれがロールモデルの対象になっている。「民族キャンプに子どもを連れてくる『保護者の会』のメンバーのような家庭を築きたい」と、彼らの一人が語ってくれた。ロールモデルの循環が行われているのである。仲間との出会い、民族文化との出会い、ロールモデルとの出会いの中で、子どもたちの民族的なアイデンティティが育成されているのである。

最後に、今後の課題について述べて稿を綴じたい。

一つは、「保護者の会」に集うコリアンの保護者は全体からすれば、残念ながら少数であることである。過去の被差別体験のトラウマから脱却できなかったり、周囲への配慮があったりして、依然として民族性を隠し続けている保護者も少なくない。それは、彼・彼女たちの問題というより、少しでも異なる存在に対して「同化か排除」を迫る日本の社会風潮との関係で捉えるべきものであろう。

今一つは、「保護者の会」が中国人やブラジル人などのニューカマーの保護者とどう連携するかという課題である。いうまでもなく、民族教育はコリアンだけの問題ではない。居住歴の長い在日コリアンの民族教育権の確

立が実現できなければ、新しく定住する外国人の民族教育も保障されないであろう。最近の「定住外国人統計」では、在日韓国・朝鮮人が613,791人に対して中国人は462,396人、ブラジル人も274,700人となっており、全体比率ではコリアンは約32%を占めるにすぎない⁽¹⁵⁾。現在、ニューカマーの子どもたちの民族的なアイデンティティの育成が焦眉の急をつけている。そのようなニューカマーの子どもたちの教育とも連携させる課題が残されている。

「保護者の会」は、民族教育を教師任せにするのではなく、自分たちの課題として受け止め、可能な範囲で活動を展開してきた。当事者の組織化としての活動内容が、一つのモデルケースとなれば、在日コリアンだけでなく、マイノリティーの子どもたちの民族的アイデンティティを育む教育はさらに進展するであろう。

注

- (1) 中島智子『1970年代以降の在日韓国・朝鮮人教育研究と実践の体系的研究』科学研究費報告、課題番号13610328, 2004, pp.209-238,
本文で紹介した発表内容は全国在日外国人教育研究協議会が毎年出版している『これからの在日外国人教育』に掲載されている
- (2) 財団法人入管協会『平成16年版在留外国人統計』, 2004
- (3) 朝日新聞・奈良新聞, 1992/9/14
- (4) 奈良・在日外国人保護者の会小冊子「ウリ・マダン（私たちの広場）」, 1993, 自家製版
- (5) 京都大学教育学部比較教育学研究室『在日韓国・朝鮮人の民族教育意識—日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』, 明石書店, 1990, p20,
そこでは以下のような数値になっている。
子どもに通名を名のらせる理由—韓国・朝鮮人であることを知られたくないため1.3%, からかわれたり, いじめられたりしないため5.7%, あえて名の必要を感じないため61.9%, 親の仕事, 地域での生活に差しさわりがあるため6.4%, その他13.8%.
- (6) 奈良・在日外国人保護者の会ビデオ「保護者の会1年の歩み」, 1993, 自家製版
- (7) 奈良・在日外国人保護者の会『生きる力となる教育を求めて』1998, 自家製版, p.26
- (8) 前掲書pp.5-6
- (9) 在日本大韓国民団中央本部H P 人口推移
<http://mindan.org/toukei.php>
- (10) 奈良県同和教育研究会『くらしをみつめる子ら—小学校・中学校児童・生徒人権作文集』第39集, 1997
- (11) 奈良在日外国人教育研究会, 2002年調査結果
- (12) 田淵五十生「民族的アイデンティティを育む教育とは—子どもたちの作文が示唆するもの—」『高円史学』（奈良教育大学歴史学教室）, 第20号, 2004
- (13) 佐藤郡衛『国際化と教育』, 放送大学振興会, 2003, p.205
- (14) 「大阪府民族講師会」と「在日コリアン青年連合（KEY）」の在日3世・4世の青年がリーダーを務めている。県内に民族講師が配置されていないためである。
- (15) 財団法人入管協会『平成16年版在留外国人統計』, 2004

参考文献

金東熙『共生時代の在日コリアン—国際人権30年の道程—』
2004, 東信堂
高賛侑『国際化時代の民族教育
—子どもたちは虹の橋をかける—』1996, 東方出版
中島智子『多文化教育と在日朝鮮人教育』1995, 全国在日朝鮮
人教育研究協議会
民族教育ネットワーク編『民族教育と共生社会—阪神教育闘争
50周年集会の記録』1999, 東方出版
姜尚中『在日』2004, 講談社

謝辞: これまで「保護者の会」と共に試行錯誤を繰り返し、協
働作業をしてきた教職員の皆さま, 生駒市をはじめとする
自治体職員の皆さま, そして, 在日コリアンの子どもに向
きあっていただいた全ての皆さまに, この場をお借りして,
心からお礼を申し上げます。